

ピアノの構造と音の出し方 ～正しいタッチと脱力を学ぶ



講師◎岳本恭治
1月27日◎ヤマハミュージックアベニュー池袋

取材・文：生田美子（ピアニスト・作曲家・音楽評論家）

本誌をテキストにした「ピアノの先生応援セミナー」の1回目が、1月27日ヤマハミュージックアベニュー池袋で開催された（ヤマハ池袋店主催）。本誌2010年4月号から2011年2月号まで隔月で掲載された「楽器の森」を基に、その執筆者である岳本恭治氏が、演奏に役立つピアノ構造と奏法について、演奏実践を取り入れながら解説した。岳本氏は、ピアノの構造学や改良史を研究し、調律も学ばれた演奏家である。約70名の受講者は、本誌を片手に熱心に講義を受け、岳本氏の楽しい冗談に、会場からはしばしば笑い声も響いた。

最初に、ピアノの演奏がどれくらいの音量で会場に響くのかについて。ピアノの名称を楽しく学びながら進められるピアノ音量の実験に、参加者の笑いも驚きも絶えなかった。岳本氏からのレッスン時における音量のアドバイスや、歴代の名演奏家が残したピアノ音量に関する名言のなかには、ドキッとするような鋭い指摘も。

次に、ピアノの内部を見せながら、楽器構造について説明。鍵盤の仕組みをよりよく知るための実験や、受講者が実際にキー（鍵）を持つ体験など、まさに能動型セミナーだ。鍵盤の長さやピアノのサイズの関係、ピアノの音が鳴る原理、フォルテの音量に必要な重さについてなど、ピアノ構造の基本についても学べ、さらに、響きのある音を出すためにはどのように演奏すればよいのかという上達へのポイントや、スタッカート奏法の留意点についても、実演を入れながら分かりやすく説明された。

また、本番のピアノの種類によって演奏がうまくいかなかったという経験がある方に必聴の、その解決方法についても、的確な助言があった。そして、普段なかなか見る機会の少ない、ピアノの原型ダルシマー（本誌2010年12月号p96）の実物紹介では、受講者は身体を

乗り出して見入っていた。

さらに、ショパンが当時、生徒に課していた脱力のための指の訓練方法や、彼の作品における指の動きの秘密、またチェルニー30番を用いた、音階や連打の効率的な練習方法が公開され、受講者は興味津々。これは聞き逃せない話だ。

最後に、ペダルの歴史とその構造原理から、ペダルの踏み方の考察もなされた。作品の時代によって使い分けるペダル奏法についての話などは、作品様式を踏まえた演奏をする際に是非知っておきたい内容だ。鍵盤上の指のテクニックだけでなく、いかにペダルの踏み方が演奏を左右するのかを考えさせられる好機となるであろう。

このように、ピアノの構造を知った上での脱力や響きのある音（大きい音ではない）の実践を目指す当セミナー、今後も各地で開催予定とのこと。ピアノの上達に必然なピアノの知識と能率的な練習方法を身につけたい方には是非お勧めしたい。



満席の受講者で熱気に包まれた会場

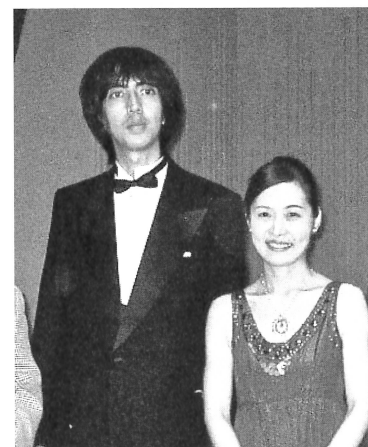
多彩な心象風景を描写 エストニア・ピアノ音楽のタベ

2月9日 ルーテル市ヶ谷センター（東京）

取材・文：真嶋雄大

エストニアは、ラトビア、リトアニアとともに、バルト三国として知られる。このコンサートは、日本・エストニア国交樹立90周年、国交回復20周年などを記念して開かれた。プログラムは、すべてエストニアの作曲家による作品である。

演奏は武蔵野音楽大学、同大学院に学び、第1回全日本フランス音楽コンクールに第2位入賞などした吉岡裕子と、東京藝術大学及び同大学院を卒業して現在モスクワ音楽院で研鑽を積む秋場敬浩で



左から、ピアノの秋場敬浩氏と吉岡裕子氏。

ある。2人はエストニア音楽の発掘、紹介を目的とした『エストニア・ミュージック・プロジェクト』を2004年に立ち上げ、エストニア文化の啓蒙に尽力している。

この日、まず吉岡が3曲を演奏。ルドルフ・トビアスの《4つのピアノ小品「春に」よりメヌエット（1913：日本初演）》は軽やかな透明感を有し、古典的な趣と独特のアクセントが印象的だ。マルト・サールの《4つの前奏曲（1908～23）》も斬新な和声推移と古典的手法が内包されて煌めくような抒情が立ち上る。そしてヘイノ・エッレルの《鐘（1929）》は陰鬱で仄暗い響きが、心象風景の移ろいを標榜する。

続いて秋場が、エドゥアルド・オヤ《静かなる心象（3つのピアノ曲）（1930：日本初演）》、エドゥアルド・トゥピン《2つの前奏曲（1927～28）》、《マルト・サールの主題によるバラード（1945）》を演奏、極めて美しく存在感のある音色と清冽で淀みないタッチで、多彩な情景を描写した。



後半は、吉岡によるエステル・マギ《ラップランドのヨイク（1987）》やレネ・エースペレ《ルドゥス・タクトゥス（2008）》、秋場によるユリ・レインヴェレ《ウルヴァステのタベ（1987）》やトゥヌ・クルヴィッツ《冬の小道（2004）》など、ほとんど日本初演の曲が並べられ、無機質な佇まいと潤いのある感傷、静謐な祈りと躍動する生命力など、相反する要素が巧みに融合し、生き生きとした情熱を構築するエストニア音楽特有のエモーションを鮮やかに紡いでいた。

「機能」と「デザイン」を兼ね備えた究極の贅沢

透かし彫り譜面台

透かし彫りにすると…

譜面台に透かしを入れると音の反射が少なくなることによって、奏者に音が聞こえやすくなり表現力がアップする等、デザイン性以外の利点もあります。

一度手に取ってみたい方は、資料や原寸サンプルの無料レンタルが可能です。お気軽に下記のメール・お電話にてお問い合わせください。

※イメージ画像です design by Shiori

株式会社 総合ピアノサービス

TEL(089)971-9275 FAX(089)971-9207
Email:piamatsu@bronze.ocn.ne.jp

詳しくはホームページを!
http://www.genepis.jp/

ジェネピス

検索